

イギリス林野庁のレンジャー

平 川 浩 文

筆者は1990年に科学技術庁長期在外研究員としてイギリスの森林研究所に滞在しており、調査の関係でイギリス林野庁に所属するレンジャーたちと多く接する機会があった。彼らは野生動物管理を専門とする職員であり、日本の政府にも民間にもあまり例の見られない職種である。この紙面を借りて、その活動ぶりやイギリス林野庁の野生動物管理の現状を紹介したい。以下はイギリス滞在中にまとめておいたものである。発表が遅くなり、価格等現状に合わなくなった面もあるが、ご容赦願いたい。

Forestry Commission はイギリスの政府組織の一つで、グレート・ブリテン（イングランド・スコットランド・ウェールズのみ、北アイルランドは含まない）の国有林施業を主目的とし、私有林を含む林業・林産業のための森林政策・施業を監督する、ちょうど日本の林野庁に当たる組織である（以下ではイギリス林野庁とする）。

イギリス林野庁は1919年に森林面積と木材生産の増大をめざす国策を推進するために設立された。設立当初から、森林被害を防ぐためウサギやリスのコントロールを専門とする人々が雇用された。それ以来、技能は蓄積・継承され、野生動物レンジャーは現在、高い野生動物管理技能を持つ常勤の専門職種となっている。レンジャーの主たる任務の一つはアカシカ・ノロジカ・ハイイロリスの防除である。しかし、1985年の法整備（野生動物および田園に関する法律）によって、野生動物の保護と森林の多目的利用が強調されるようになり、レンジャーの役割もこれに呼応して、変わりつつある。

グレート・ブリテンは七つの営林局（forest conservancy）に分けられ、各営林局は6から10の営林署（forest district）からなり、これが基本

管理単位となっている。各営林署は数人のレンジャーを抱えており、営林署長の全般的監督のもと、直接には非生産部門森林管理官（nonindustrial forest manager）下に所属する。各営林局には環境係官（environmental officer）がおり、また大部分の営林局にはレンジャーの筆頭職として野生動物森林官（wildlife forester）がおり、営林署に対して指導を行う。

シカの狩猟は個体数の削減か、安定的維持を目的として定められた雌雄別の頭数にしたがって行われる。レンジャーはそれぞれ異なったエリアを担当し、多くの場合単独で仕事を行う。狩猟は主に早朝と日暮れ時に行われる。毎日営林署に顔を出す必要はなく、日の長い夏には日中睡眠をとる場合もある。一人に1台ずつ専用車があてがわれている。この車の屋根にはスポットライトがつき、夜間の狩猟と観察に使用される。また、シカの屍を楽にかつ衛生的に扱えるよう、ウィンチの設備もある。

ハイシート狩猟（highseat shooting）やしのび撃ち（stalking）が主な狩猟法である。屍は貯蔵庫（larder）と呼ばれる処理保管施設へ運ばれ、体重その他を測定し、齢査定のための下顎の骨を標本として分離した後、冷凍庫に吊り下げられる。

各営林署にはいくつかの貯蔵庫がある場合もあるが、数人のレンジャーが一つの貯蔵庫を共用する場合が多い。保管された肉は、営林局と契約した野生動物の肉を扱うディーラーが定期的に回収する。ディーラーに売却された肉は、大部分がドイツへ輸出される。

レンジャーは有料でハンターのガイドを行うこともある。通常5月から7月にかけて、1週間を単位に顧客を持つ。顧客の大部分は外国のハンターであり、ドイツ人、デンマーク人が多い。レンジャーは1週間のうち早朝と日暮れについて

それぞれ4回ずつ狩猟に案内し、ガイド料は狩猟の成否に関わらず500ポンド(1990年のレートで約12万円)である。営林署は肉を取得し、ハンターはトロフィー(角を含む頭部のこと:ヨーロッパのハンターの関心は立派なトロフィーを手に入れて、壁を飾ることである)を持ち帰る。ただし、ハンターはガイド料の他に、質に応じてトロフィー料を払う必要がある。多くの顧客は繰り返し訪れており、この活動に満足しているらしい。

狩猟頭数は各営林署ごとにレインジャーと森林官で協議の上、決定される。以前、この数はどんぶり勘定で決められていたが、最近は科学的個体群管理のシステムがRatcliffe (1987) にしたがって導入されつつある。このシステムは間引きされた個体の年齢・性・妊娠率・体重と、シカの密度の情報に基づいている。さらに、シカの個体数変動によって引き起こされる被害を予測するため、森林構造の変化も考慮されている。

このシステムを導入するため、定期的に研修が行われている。営林署長は1日、森林官は1週間、レインジャーは2週間のコースである。さらに、営林局の幹部にこのシステムを理解させるためのセミナーも行われている。

シカによる被害は激しいことが多々あり、植林に多大の困難とコスト高をもたらしている。多く

の営林署ではレインジャーの存在にも関わらず、シカ個体数を制御できず、被害防止のためにフェンスも用いられている。

レインジャーの野生動物の保護に関する仕事には、鳥類・哺乳類・両生類・は虫類・魚類から無脊椎動物にわたる広範囲の動物や植物の生息地の管理その他がある。森林に対する市民のレクリエーション需要も増大しており、これに対応した森林整備や監視・案内もまたレインジャーの仕事の重要な一部となってきている。このように、森林に期待される役割が大きな変質を遂げている今、環境や厚生利用のための貴重な人手として、その役割は拡大しつつある。

野生動物を相手にした仕事が好きでこの職場に入った人が多く、人や時間に縛られないことも大きな魅力のようだ。しかし、レインジャーの給与ランクは低く、若いレインジャーの中にはこのために、仕事を離れる者もいる。逆に、ある程度の社会的な成功を納めて生活が安定してから、その魅力からこの仕事につく者もいる。我々には、なじみがないライフスタイルの人々であるが、いかにも魅力的な人物が見られたこともつけ加えておきたい。

(森林総合研究所北海道支所)



写真1 貯蔵庫 (larder)。手前の白壁の小屋



写真2 貯蔵庫で獲物 (ノロジカとウサギ) を処理するレインジャー



写真3 レインジャーたち